

小学校英語の教育方法

— 子ども達を効果的な学習に導く指導について —

戸谷 敦子

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

本稿は、小学校での英語の学びを支える教育方法について、子ども達の特性や学習観に関する文献に焦点を当てながら論じた。学習スタイル論からは、子どもの感覚の特性（視覚、聴覚、運動感覚）を考慮した指導方法について検討した。次に、Moonの論考からは、英語学習入門期の子ども達の効果的な学習をサポートするために教師が留意すべき点について検討した。小学校から始まる英語教育の実りある学びのためには、教室内の子ども達の多様な特性や学習観を把握し、日々の授業に活かすこと、そして子ども達自身が自立した学習者に育つよう支援していくことが重要である。

キーワード：ESL (English as Second Language), 教育方法, 小学校英語教育, 学習スタイル, effective learning

1. はじめに

2020年から小学校での英語教育が全面実施となる。早期英語教育への反対意見もあり、長い検討を経ての導入（岡，金森 2012）¹となったが、子ども達を取り巻く外国語学習の現状を鑑みると、小学校での英語教育を充実させることは喫緊の課題である。保護者の高い関心やグローバル化の進展を背景として、子どもへの英語教育需要は社会の中で増々強まっている。民間企業による子どものための英語教室は、都市部を中心に数多く展開されている。その中には、幼児期からネイティブの講師について英語を学ぶプログラムもある。また、高額なDVD等の英語教材や通信教育も販売されている。保護者の関心度や社会経済的背景の違いによって、学習機会に早期から格差が生じることは、教育の機会均等の観点からも望ましくない。義務教育の早い段階で、英語教育が導入されるのは賢明と言える。2020年から本格始動する新しい学習指導要領のもと、質の高い英語教育がすべての小学校で展開されていくことが肝要である。

本稿は、初めて外国語を学ぶ子どものための英語教授法に焦点を当て、子どもの特性を考慮した学習方法と、効果的な英語学習に導く方法の2つのトピックについて海外の先行研究を引用しながら論じる。

2. 子どもの特性を考慮した学習スタイルに関する研究

新学習指導要領では、小学校3年生から「外国語活動」として週1時間、年間35時間の

英語学習が始まる。5年生からは評価をとまなう教科としての「外国語科」が週2時間、年間70時間で行われる。クラスの中には、すでに塾等で英語の音声や文字に慣れ親しんでいる者もいれば、全く初めて学習する者もいるため、教室内の英語運用レベルはすでに多様であろう。ペアワークやグループワークを工夫し、教え合いながら、すべての子ども達が楽しく英語の授業に参加できる工夫が必要である。また、英語力の差以外にも、考慮に入りたい学習上の個人差（もしくは個性）についても教師は知っておきたい。学習スタイル理論（learning style theory）は、子どもの学習上の特徴を把握して、それぞれに適した教授法を採用することで、学習成果をあげることを提唱している。研究者達によって様々な説が提唱されているが、本稿では特に外国語学習に関連して取り上げられることの多い Barbe（1979）のVAKモデル²について言及する。

VAKとは、Visual, Auditory, Kinestheticの頭文字をとった呼称で、それぞれ視覚、聴覚、運動感覚を意味している。Barbeは、子ども達の感覚の特性は大きく3つに分類され、その適性に合わせた学習スタイルがあると論じている。また、もっともよくある感覚（学習

表1 VAKに基づく学習スタイル

学習スタイル	学習方法の好み（Preference）	新しい課題（task）の際、 適する学習方法
Visual learning style （視覚による学習スタイル）	見たり観察したりすることを通して学ぶことを好む、以下は参考例。 Pictures（写真や絵） Diagrams（図や表） Demonstrations（実演） Displays（表示） Handouts（印刷物） Films（映画） Flip charts, etc. （フリップチャート（説明用のための図や表が描かれた複数枚のカードが上端で綴じられている。1枚ずつ捲りながら説明する）など）	読み物を読んだり、誰かが先行して行うのを見てから課題を行う。
Auditory learning style （聴覚による学習スタイル）	自分や他の人の話す言葉や、音、ノイズなどを聞くことを通して情報の伝達を好む。	エキスパートからの説明を聞いた後に新しい課題を行う。電話を通して良い。聞いた歌のすべての歌詞を思い出すことができる。
Kinesthetic learning style （運動感覚による学習スタイル）	身体的な経験を好む、以下は参考例、 Touching（接触） Feeling（感じ） Holding（抱く） Doing practical hands-on experiences（実際に体験する）	新しい課題を行う際には、進んでやってみる、挑戦する、実際にやりながら学んでいく。
出所：Jayakumar他（2016）を基に筆者作成。		

上の強みとなる感覚)は、視覚もしくはmixed(感覚が混ざったケース)としている。加えて、子どもの感覚の特性は、時間の経過とともに変化し、年齢が進むについて統合されると説いている。表1はVAK理論を援用したJayakumarら(2016)³の研究を基に、3つの感覚とそれに対応した学習スタイルをまとめたものである。

VAKに関しては、理論を支持し学習上の適正を診断する研究⁴がある一方、VAKモデルを多用することに懐疑的な反論もある⁵。

筆者は入門期であった(当時)中学校で英語を教えた経験から、学習者の学びに向かう姿勢は多様であり、すべての学習者を授業にとり込んでいくには、個々の英語運用能力の差以外にも、性格や得意(不得意)な活動等を把握した上で、多様な学習機会を提供し体験させていくことが大切と考える。Listening, Speaking, Reading, Writingの4技能を、単一であったり組み合わせたり、個人で取り組んだりペアやグループで協力したりと、多様な学習活動を体験する中で、自分の好きな活動や得意な技能に出会う機会があると学習者の英語に向かい合うモチベーションも上がりうる。感覚の特性とそれに対応した学習活動を提示したVAKの理論は、授業計画を立てる際の参考になる。

3. 効果的な語学学習に導くには

英語に限ったことではないが、学び続けることで、その教科の理解は高まり、学業成果は積みあがっていく。では、どうしたら子どもたちは自ら学び続けることができるようになるのだろうか。教師は毎日の授業を充実させることとともに、その点にも留意しながら授業を仕掛けていかなければならない。子ども達を、与えられるだけでなく自らも学ぶ姿勢をもった学習者に導くことは、外国語のように習得するには長い時間のかかる教科の指導にとって特に大切な視点である。

新しい学習指導要領で、より早期且つ長期になる英語教育によって、英語嫌いが増えることは防ぎたい。2015年にベネッセが中学生を対象に行った調査では、「好きな教科・活動ランキング」で英語が第10位と、中学校段階での英語嫌い傾向が顕著である⁶。英語教育が早まったことで、英語嫌いも早まってはいけない。初心者は少しずつ音声に親しみ、語彙を増やし、基本的な表現を体得しつつ、さらに上のレベルに向けて英語の4技能を伸ばしていく。しかしながらその途中で、例えば母語とは異なる音声や文法の違いに戸惑い、苦手意識が生じた時に、学習者を励ますものは何だろうか。

前章のVAKで言及した、自分の好きな(得意な)学習活動も一つの役に立つであろう。Audio learning傾向のある子どもにとって、チャンツや英語の歌は、気分転換になるだろう。歌に合わせたジェスチャーやじゃんけんなどがあれば、Kinesthetic learning傾向の子どもにとっては、うれしい時間である。本好きやVisual learning傾向の子どもは、英語絵本の読み聞かせによるエキゾチックな世界観で魅了されるかもしれない。そしてそれ以上に、学習者自身が、自分にとって効果的な学習の仕方を身につけていることが大切である。苦手意識が生じた時や、なかなかレベルアップできないプラト一期(学習の伸び悩み期)に

突き当たった時、めげずに勉強し続けるには、自分自身が学習に向かうための動機付けや効果的な学習方法を知っていることが助けになる。教師は日々の授業を通して、この力も育てていくことが望ましい。

この分野に関して、Moon (2006) ⁷は興味深い示唆を与えてくれる。以下からは、Moonの論考を引用しながら考えていきたい。

3-1. 教師の視点から見るsuccessful language learners

Moonは、子ども達をより効果的な学習に導くには、まず教師自身が効果的な学習者もしくは教育者とは何かについて理解していないと難しいとする。そこでまず、教師の目からみたsuccessful language learners (成功した、好結果の語学学習者) とはどのような子ども達か、その特徴について考えることを勧める (例えば、担当するクラスの上位2名を思い浮かべ、その特徴 (成功の秘訣) について考えるなど)。

クラスの中の子ども達の特徴は多様である。素早く教師の問いかけに反応し発言も多い子ども、おとなしく控えめだがよく観察し理解している子ども、恥ずかしがり屋で何も言わない子どもと多様である。そして、学期の終わりには顕著な学習成果を示す子ども達があり、それほどでもない子ども達もいる。成功している子ども達を見て、何が効果的な学習者足ることを支えているのかを特定することができるか、とMoonは問いかける。

結論として、Moonはsuccessful language learnersの特徴は多様であると論じる。積極的な子ども達の多くが必然的にいつも成功した語学学習になるわけではなく、おとなしい子ども達もまた成功している。最も発言の多い子どもは教師達の注目を得やすいが、いつも最も効果的な学習者というわけではない。子ども達は他のクラスメートがどのように学習しているかを知ることによって恩恵をうけているかもしれず、そうすることで彼らは外国語学習の方法には自分とは違ったやり方があることを理解するのだと論じる。

Successful language learnersをよく観察すると、かれらを他の学習者から顕著に際立たせるものは、性格や個性的な特徴の差異ではなく、自分で学習方法を柔軟に操ることのできる能力であるとMoonは主張する。

3-2. 子ども達の視点から見るsuccessful language learners

子ども達は「成功した、好結果の語学学習者」についてどのようなイメージを持っているだろうか。教師は教育観や指導目標をもって教育活動を行っている。一方で、子ども達自身もかれらなりの学習観 (もしくは学習者観) をもって日々勉強に取り組んでいる。勉強に向かう際、語学学習者としての自分に肯定的なイメージがある場合と、否定的なイメージがある場合では、学習効果に影響が出るのではないだろうか。

Moonは聞き取り調査の結果から、子どもによってsuccessful language learnersのイメージが違うことを示す。例えば、同じ教室内であっても、ある子どもは、「どんなタイプの子でもでもなりえる」と答え、別の子どもは、「恥ずかしがるタイプでは困難だ」と答える。

後者の場合、もし本人がそのタイプならば、自身の学習者観によって語学学習では成功できないと思うかもしれない。教師は子ども達の学習者観を見出したら、それについて彼らと話し合うことを通して、語学学習の本来の展望を持たせ、努力が成功につながることをわからせることができるだろうと勧めている。

次に、年齢別の学習観の違いを示し、発達段階によって生じるその違いをどのように教授方法に活かすのかについての示唆も興味深い。表2は「英語を習得するため何をしますか？」に対する3つの年代グループの返答をMoonがまとめたものである。表にあるように、7歳児、10歳児グループとも教室での学びを中心とした学習観であるが、多様で楽しい活動を連想する7歳児に比べると、10歳児は努力を伴う真剣な学びである。一方、教室外に目を向けた外国旅行をあげた子どももいる。13歳児グループも教室での学びと関連しているが、映画や歌といった教室外での学びがさらに増えている。

表2 英語を習得するため何をするか

13歳児グループ	10歳児グループ	7歳児グループ
自宅で練習する 歌 練習問題集 本を読む テープを聞く 映画を見る	練習する 勉強する 授業で集中する 努力する 宿題をやる 毎日少し文章を訳す 外国を旅行する	ゲームや歌 本 お話し 遊ぶ ペーパーワーク 先生 書く 読む ビデオやテレビ
出所：Moon（2006）を基に筆者作成， p 165.		

これらの結果から、Moonは年齢が上がるにしたがって、子ども達は教室から外の世界に学習観を広げることを指摘している。語学学習は教室だけでなく、自宅や旅先でも機会はある。Moonは、インドネシア人の教師が子どもの頃、鏡に映った自分を相手に英語会話を練習していた例を挙げ、学校外での様々な学びの機会に目を向けるよう子ども達を励ますことで、彼らをより自立した語学学習者に導くことが出来ると論じる。

3-3. 学習方法を学習するには

課題学習に困難を抱える子どもに尋ねると、「なんだかよくわからない」、「どこがわからないのかよくわからない」といった答えが返ってくる時がある。これは子ども自身がどこで躓いたのか、どうやったらわかるようになるのか、よくわからないという状況を意味している。学習過程で道に迷ったら、子ども達はどうしたら良いだろうか。座り込んでいては出口にたどり着けない。人に尋ねたり歩き回ったりと、迷いながらも色々試してみるうちに、なんとか出口にたどり着くことができるだろう。語学学習もまた同様に、試行錯誤を繰り返していく過程で学び取り、上達していくことができる。子ども達自身が、自分なりの学習方法を見出していくために、教師はどのような点に注意したら良いだろうか。

Moonは、効果的な学習者になるためには、子ども達は自身の学習について自覚する必要があると説く。まず、子ども達が自分の行動を一步下がって客観的に見ることができると、そして自分の学習について自覚することで、自分の学習方法を変え、コントロールし管理できるようになると説く。また、何が自分の学習を助けてくれるのかについても自覚する必要があるとする。そのためには、教師は子ども達が次の4つの点について自問するよう導き、支援する必要があると主張する。

1. 自分の学習方法は何か、それはどれくらい効果的か。
2. なぜ学んでいるのか。ゴールに到達するための学習計画は何か。
3. 自分の学習方法の感じ（調子）はどうか。時間やスキルを最適に使っているか。
4. 自分自身の学びの評価はどうか。適切な改善策は何か。

Moonは、子ども達が自分で学習方法を調整できる力が身につくように、教師が計画立てて導くことが大切であると説く。学習方法をモデル化したりして、子ども達にも分かりやすく伝えることが必要である。Moonは、少数の子ども達は自分で気づき、学びをコントロールできるようになるが、大多数の子どもはそうではない、しかし、教師や大人がサポートしてやることで、どの子どもも学びを自覚しコントロールできるようになると論じる。

4. おわりに

本稿では、海外の先行研究を引用しながら、小学校での英語教育を通して、子ども達を効果的な学習に導く方法について検討した。教室内の子ども達の個性や英語に向かう姿勢は多様である。教師はその多様性を把握し、授業に活かすことが求められる。学習スタイル論のVAKモデルによる視覚、聴覚、運動感覚の3つの感覚とそれに適した指導方法の提唱は、子ども達それぞれの特性を網羅した授業活動を計画する際に参考になるであろう。

子ども達が語学学習で上達するには、目標をもって自分で学習計画を立てたり、自分の学習方法を改善したりできることが肝要であるが、Moonが指摘するように、多くの子ども達にとって、そのような自立した学習者になるには教師のサポートが必要である。

英語学習は異文化理解への扉であり、子ども達は外国語の音声や文字を学ぶことで異文化に触れ、2つの文化を比較することで自文化への理解を更に深めることができる。また、言語知識だけではなく、英語での自己紹介や対話などを通して、教室内のクラスメートたちもまた自分とは異なる考えや文化をもつ存在であることに改めて気付くことができる。学習観についても同様に、クラスメートのコミュニケーションの取り方や学び方の自分との違いに気づき、それを自分の英語や学習方法に活かすことができれば、英語の授業での学びの効用は高まる。教師は、子ども達に学習の仕方についても学ばせることに留意しつつ、授業をデザインしていくことが肝要であろう。

次の研究では、具体的な指導例を調べ、好事例について研究していきたい。

参考文献

- 1 岡秀夫, 金森強 (2012) 小学校外国語活動の進め方. 成美堂. 16頁
- 2 Barbe, Walter Burke; Swassing, R H.; Milone, M N. (1979). Teaching through modality strengths: concepts practices. Columbus, Ohio: Zaner-Bloser.
- 3 Jayakumar, A S; Sundaramari, M; Prathap, D. P(2016) Understanding Learning Style Variations among Undergraduate Students. Journal of Extension Education Vol.28 No. 4,p5729.
- 4 Krätzig, G P.; Arbuthnott, K D. (2006). Perceptual learning style and learning proficiency: a test of the hypothesis. Journal of Educational Psychology. 98 (1): 238-246.
- 5 Sharp, John G.; Bowker, R; Byrne, J (2008). VAK or VAK-uous?: towards the trivialisation of learning and the death of scholarship. Research Papers in Education. 23 (3): 293-314.
- 6 ベネッセ教育総合研究所 (2016) 第 5 回学習基本調査DATA BOOK 2015. https://berd.benesse.jp/up_images/research/5kihonchousa_datebook2015_all.pdf
- 7 Moon, Jayne. (2006) Children Learning English (MacMillan Books for Teachers) .MacMillan. London.